

地山のすぐ下に止まり、女親石は五〇〇メートルほど離れたところに止まり、子供石は八キロメートルはなれた長藤村の中条という所に止まったという。―(『長野県史』民俗編・第二卷(三)五八三頁・長野県史刊行会・一九八九)

この伝説は先の伝説の異なる形態のもので、基本的内容は変わりませんし、その意義も同じだといえるでしょう。

これまで見てきた蛇抜けの伝説は、蛇抜けが天竜川の支流部分でいかに恐れられていたかを伝えていると思います。蛇抜けという語の説明は色々ありますが、土石流が蛇抜けと呼ばれたことは、大蛇が抜けたことよってこの災害は引き起こされているという理解が底辺にあったのでしよう。前章で洪水が大蛇と関係して理解されたことについて触れましたが、蛇抜けもまた同様の性格をもつものだったのです。

第三章 竜と釣鐘と雨・水

これまで触れてきた伝説によって、天竜川の洪水と竜とが深い関係にあり、その支流で引き起こされた土石流、すなわちこの地方で蛇抜けと呼ばれる災害が、竜ニ大蛇によってもたらされるという考え方があったことが明らかになりました。そこで次に、洪水が竜そのものが原因になって起こるといふ考え方を前面に出した伝説を確認していきたいと思えます。

(一) 功德寺の鐘(茅野市北山湯川)

この先二〇メートルばかり先に寺があるんですが、この寺の釣り鐘を、大昔、伝えられている話ですが、盗んで、諏訪市の向こうの岡谷市ですが、岡谷市の小坂観音へ持って行くとして、ま、盗んだだから、寺のだれもないときでしょう。そしていって上諏訪から諏訪湖を船に載せていくと、近いわけ。船に載せていったら、非常にいいお天気だったのに、小坂の岸へつく少し手前に、それこそ一天にわかにかき曇り、そして諏訪湖が極端に荒れ

て、そしたらしたから竜が出てきて、その鐘をぐっと巻いて海の底へ沈めちゃった。諏訪湖のそっこへね。そして鐘が下へ沈んでしまったら、天気はまたもとの静かな晴天にもどってしまったという。で結局、竜宮から取りに来たんだといういい伝えがあった。――『長野県史』民俗編・第二卷(三)六一〇頁・長野県史刊行会・一九八九)

伝説では、茅野市の湯川の寺の釣鐘を泥棒が盗んで、諏訪湖を船で渡って岡谷の小坂観音へ持っていこうとした。ところが当日は非常に良い天気だったのに、小坂の岸に着く少し手前で、一天にわかにかき曇り、諏訪湖が非常に荒れて竜が出てきた。そしてその鐘に巻き付いて諏訪湖の底に沈めた。鐘が底に沈むと同時に天気はまたもとの静かな晴天に戻った。これは鐘を竜宮から取り戻しに来たのだといわれたとしています。

ここで問題なのは、鐘を取りに来たのが竜であり、竜が湖から鐘を取るために姿を現わした時には、一天にわかにかき曇ったということです。伝説には出ていませんが、おそらくこの間に暴風雨でもあったのではないでしょうか。つまり、竜が怒ると天気は悪くなり、大暴風雨が呼び起こされるのです。

ちなみに諏訪湖の湖底や天竜川に鐘が沈んでいる、沈んでいたという伝説は他にもあります。参考までにそうしたものを挙げておきましょう。

(二) 湖底に沈むつり鐘(岡谷市)

ずいぶんむかしのお話です。

まっさおな諏訪湖の水が、するするとながれて天龍川となります。そのくちもとに花岡(岡谷市湊花岡)というところがありました。

そこは水神ぶちといって、諏訪湖のうちでもたいへんふかいところでした。

なんでもこのふちに、大人が両手をぐっとひろげても、まだそれよりもでっかいという、とほうもない大なまますがすんでおりました。

この大なまます、夜はひっそりと湖の底ふかくもぐりこんでじっとしているが、ひるまになると、のっそり水の上にかびあがりました。湖の岸をあるいている人、湖の上で魚をとっている人をみれば、さっと、目もとまらぬはやさでおそいかかって、ガブリと、ひとおおいにくいころすのです。

ですから、このきんじよの人たちは、うんとおっかな

がり「大なまず」ってことばをきいただけで、もうまっさおになり、みんながくがくとふるえあがりました。

この話をきいて、このところにおいでになる龍神という神さまはとっても心配になり、なんとか大なまずをやっつけたいと思いました。けらしいの「おとぼう」にめいれいして、退治させることにしました。

おとぼうは、魚のようにすいすいとじょうずにおよぎ、またどんなにおそろしいけれども、す手でまかしてしまふというごうけつものでした。

さっそくおとぼうは水神ぶちにでかけました。大なまずは、まっていたとばかりおとぼうにとびかかり、湖の中へひっばりこみ、はげしくつかみあいになりました。

バシヤ、バシヤ、湖の波が大あらしのように大ゆれです。水の上で上になったり下になったり、また、つかみあったまま水の中にはいったきり、しばらくでてこなかったりしました。

両方とも血だらけです。ものすごいかくとうです。おとぼうは、なんどもあぶなかつたが、さいごに大きなげんこつで、みけんをいやというほどガンとなぐりつけました。さしもの大なまずもこれにはたまりません。でっかいおなかを上にして、ぐたっと気ぜつしました。お

とぼうは大なまずの首ったまを、ぎゅっとなわでしばりあげ、自分のせいより長い大なまずをひっかついで、龍神さまにみせようと、花岡の坂を、えっくらえっくららっぽっていきましました。

すると、いままで死んだようならんとしていた大なまずが、きゅうに、ビュッとからだじゅうの力をこめて、ひとはねはねました。

さすがのおとぼうも、ふいをくらってはねとばされましました。そのあいだに大なまずは、ゆうゆうとふたたび水神ぶちの底ふかく、つんもぐってしまいました。（それからあと、このところをなまず坂とよんでいます）

それから、ほんのちよっとのあいだは、なにごともしなかつたのですが、また、大なまずのやつ、人間をみればかたっぱしからおそいかかり、つきつきとくいころしました。まったく手がつけられず、どうしようもありません。みんなは、

「こまったことだ。こまったことだ。」

と、ただそういつているばかりでした。
すると、ふしぎなことがおこりました。

花岡のすぐおとなり、小坂観音がありました。このつりがねの音はとっても美しいということで知られてい

ました。

「ゴゴーン。ゴゴーン」

すんだうつくしい音は、諏訪じゅう、いや、十里四方にまでひびきわたりました。

道をゆく人は足をとめ、仕事をしている人は手をやすめ、泣いている赤ちゃんも泣くのをやめ、みんなはその美しく、しかも、おごそかな音に、すっかりきまはれていました。

ある日のことでした。この小坂観音のつり鐘が、鐘つきどうにすっかりとつけられているのに、どうしたことか、すうっとひとりではずれました。あっというまに、あの観音堂のかけを、ゴロゴロ、ゴトンゴトンところがりおちて、パシャンと、それこそ諏訪湖がまっぶたつにわたれたかと思われるほどの大きな音をだして、底にしみました。「観音様の鐘が諏訪湖におっこちゃった。」小坂の人びとははちのすをつついたように、上を下への大きわざです。

あくる朝、村人は舟をこぎだしました。鐘は湖の底に、ちゃんとすわったようにしずんでいるのです。村人は二十ひろものなわを湖の中へいれ、鐘をぎりぎりまいて、みんなでヨイショ、コラサと、なわをたぐりました。お

もい鐘ですが、だんだんあがって水の上にかおがでて、もうひといきで舟の上にあがるといふとき、するっとすべりおち、ズブンとしずんでしまうのです。

それからあと、何回やってもまったくおなじようにならず、どうしてもひきあげられないので、そのままにしておくことにしました。

そうこうしているうちに、ふしぎなことがおこりました。あれほどあらびにあらびまわった大なまが、ピタリととまりました。だれかが湖の中にしずんだ小坂観音のつり鐘が、大なまがの上におおいかぶさって、動けないようにしているのをみたっていいました。

「ありがたや、ありがたや、ほんとうに観音様のおかげだ。」

村人は、観音様のごいしんにひれふしました。

そこで、みんなであつまってそうだし、湖にしずんだつり鐘とそっくりの新しいつり鐘をつくっておさめました。

それからあと、村はのんびりとした平和なさとなりました。

ところがそのうちに、ほんのときどきですがこんなことがありました。ま夜中の湖の中から、

「ゴンゴン、ゴンゴン、ゴンゴン、ゴンゴン、ゴンゴン。」

と、ひっきりなしに鐘をつきならす音がするんです。この鐘がひびくと、それからあと、きつと国になにごとかわきなかわったことがおきたそうです。ちかくは日清戦争（いまからおよそ七十年前、日本といまの中国とのたたい）のとき、また日露戦争（いまからおよそ六十年前、日本とロシアとのたたい）のときも、そのおこる前に、さかんになりひびきました。

このときは、むこうぎしの上諏訪までもガンガンときこえたそうです。いったいだれがつきならすのでしょうか。きつと、あの大なまずではないか、という人もいます。

また小坂のだれだれさんだったか名前をわすれちゃったが、ずっと前のよくはれた日、諏訪湖の水がすきとおって底まで見えたとき、しずんでいるつり鐘をみたっていてました。―（竹村良信『諏訪のでんせつ』一三二頁・信濃教育会出版部・一九六五）

ここでも諏訪湖の小坂観音の沖に梵鐘が沈んでいるというのですが、宝暦六年（一七五六）の序文をもつ『諏訪かのこ』には小坂観音の説明として、「此観世音は往昔漁網にかゝりて出現し給ふと也。此下の海底に昔より釣鐘あ

り」（諏訪教育会編『復刻諏訪史料叢書』第四卷三三頁・中央企画・一九八四）と記されていますから、ずいぶん古くからあった伝説と考えられます。

（三）黄金の鐘（岡谷市川岸三沢）

むかし、三沢の高尾山のきわに、お寺があったちゅう。

ある朝、おっさまが、おつとめをすませて、お寺の門のわきに立って、天竜川をながめていたら、流れのまん中に、ピカッ、ピカッと、光るもんがあったと。川の水が朝日にてらされて、光っているかと思ったが、ほうではねえようだ。

「ありゃ、いってえなんずらか。」

と、おっさまは、じっとみていたちゅう。ほううちに、光ってるもんが、だんだんつり鐘の形に、めえてきただつて。

おっさまは、たまげて、あわてえて、川ばたへ飛んでいってみたって。

ほうしたら、やっぱし水の底に、つり鐘がしずんでいただと。川の中へ、へえって、やっさ、あげてみると、鐘は高さが、四、五十センチぐれえの、ちっくい鐘だと。

水の中に、長くしずんでたで、まっ赤にさびてたつて。

「なあんだ、こんねんきたねえ鐘か。」

と、おっさまは、あわてて題目をあげたと。すると、ふしぎにも、四つのアミダ様がピカッ、ピカッと光ったと。「こりゃ、尊い鐘だ。」

と、おっさまは、だいに持ちけえって、本堂の軒につるしておいたつて。

ほうして、朝と夕方鐘をついただつて。

「ゴオーオン、ゴオーオン。」

と、こんなさびた鐘の、どっからでるかど、たまげるほどの美しいひびきが、村のすみずみまで、伝わらつて。村のしょうは、ほの音をじっときいてたと。

ほれから、ふしぎなことに、鐘がなっているあいさは、鐘にぎざまれてる四つのアミダ様が、ピカッ、ピカッと、金色にひかかつて、目をひらいていらねえんだつて。

ほのいとに、いまと、ふしぎなことがおきて、村中の評判になつたと。

村のしょうが、お寺にお参りして、「ゴオーオン。」と、ひとつ鐘をつきゃあ、ほの人は、いろいろな災難にあわねえだつて。

「ゴオーオン、ゴオーオン。」

と、ふたつかねをつきゃあ、ほの人は病気に、かからねえだつて。

「ゴオーオン、ゴオーオン、ゴオーオン。」

と、みつつきゃあ、ほの家のしょうは、みんな仲良くくらせるだつて。ほして、

「ゴオーオン、ゴオーオン、ゴオーオン、ゴオーオン。」

と、よつつきゃあ、ほの家は、おでーさまになれるだつちゅう。

むらのしょうは、うわさをきいて、ほんなら、おらもおれも、わしらもと、男も女も、年よりしょうも、お寺にお参りし、つり鐘を、ばんてについたつて。

ほれで、ひんがら、ゴオーオンと、すんだひびきが、村中へ流れて、村のしょうの心を洗ってくれたと。また、鐘をついたしょうは、ピカッと光るアミダ様をおがんじゃあ、

「なんて、尊い鐘ずら、おありがてえ。」

と、地べたに、へえつくばつたつて。

ほのいとに、うわさは、ふんとなつたと。鐘をついたしょうは、災難にゃあ、あわねえし、病気にゃあ、かからねえし家中仲良くくらせるし、ほれにみんな、おでー

さまになったって。ほれだもんで、村は、ゆたかで楽しいくらしが、できるようになったって。

村中がしあわせになれたのは、つり鐘のおかげだし、鐘がなっているあいさは、金色に光るもんで、村のしょうは、これを、「黄金の鐘」っていって、とーてもだいにじにしただって。

ほれだが人間ちゅうもんは、おうちやくなもんだ。災難はねえし、病気にかからねえし、家中仲良しで、ほのうえ、おでーさまとくりや、なんにも心配はねえ。村のしょうは、朝っぱらから、ほれ、うめえもん食えや。ほれ、酒のめやって、毎日遊びくらしてたと。

ほれだもんで、田んぼや畑は、草ぼうぼうで、村のしょうの心は、すっかりあれちまったと。おっさまは、はじめ村のしょうが、しあわせになれたもんで、おありがてえと喜んでたが、こんねん遊びくらしちやあ、村はだめになっちまうと思つたと。ほこで、鐘をみつつくことはいいが、よつつは、つかせねえことにしたちゅう。

村のしょうは、おっさまの気持がわかり、前のように田んぼや畑の仕事に、せーだすようになったと。

けんど、人間ちゅうもんは、いっぺんうめえ味をおぼえると、だめなもんだ。誰かがおでーさまのくらしが忘

れられなくて、ま夜中に、こっそりいって、そうっと、よつつ鐘をついちゃったと。なんぼう、そうっとだつて、鐘の音は、村中へ知れちまったと。ほいじゃあ、おらもおれも、わしもと、みんないっちゃあ、

「ゴオーオーン、ゴオーオーン、ゴオーオーン、ゴオーン。」

と、ついちまっただって。

おっさまは、こまったもんだ。こまったもんだ。いい考えはねえもんかと、さんざ考えただつてー黄金の鐘がなかったら、こんなことにはあ、ならなんだに……ほうだ、いいあんべえに、高尾山に底無し井戸があった。(アミダ様にゃ悪いが、ほこへ持つてつてしずめさしてもらうか) って、考えたつて。

やみのこいある夜、おっさまは、黄金の鐘をはずして、誰にも、わからねえように底無し井戸へ、しずめちまったつて。

ほれからあと、村のしょうは、前のように、ひんがらせーだして働いたと。

いまでも、女高尾山の中ふくに、底無し井戸が残つて。ほれが黄金の鐘を、しずめてある井戸だと。鐘は、まだ、ほのまんまだちゅう。

いつだったか、誰かが十五メートルぐれえの竹ざおを、井戸へおろしてみたが、先は、水のとこととどかなんだと。―(竹村良信『諏訪のむかし話』九六頁・信濃教育会出版部・一九八一)

この伝説は遠州小夜の中山(静岡県榛原郡金谷町)の無間の鐘伝説を下敷きにしているものと思われ(笹本正治『中世の音・近世の音』六九頁以下)。

(四) 釣鐘淵(下伊那郡天竜村)

平岡村を流れる天竜川に釣鐘淵というところがある。昔ここから釣鐘が上がったので、すぐさまそれをお寺へ納めておいた。日照りが続いて、いよいよ田畑の作物が枯れるという時、村中総出の雨乞いには、この釣鐘をそのところの淵に沈めて水で洗えば、必ず雨が降るということであった。―(『下久堅村誌』一八五頁・下久堅村誌刊行会・一九七三)

(一)(二)の伝説でも、諏訪湖の主は竜のようです。そしてこの竜は(一)からすると天候を司っていた可能性があります。竜は雨の神様だということ(高谷重夫『雨の神―信仰と伝説―』岩崎美術社・一九八四)が重要な意味を持つ

ているのです。

また、(四)の伝説では梵鐘は淵から上がって来ましたが、その鐘は雨をもたらすものといえます。そしてこの雨を降らすというのは、これまで述べてきた伝説からすると竜＝大蛇の専売特許だったはず(二)の伝説においては、梵鐘が淵に入って竜になってしまいました。だが、これまで見てきた伝説からも竜と梵鐘との関係の深さが読み取れます。